

古民家と昭和の記憶

平成 28 年 7 月

沼尾 利郎



「六月の田園」

1 日本の原風景

5月の連休を利用して、古民家の絵を観るため都内にある小さな美術館を訪れました。「向井潤吉アトリエ館」（世田谷美術館分館）は閑静な住宅地の中にあり、世田谷区名誉区民であった向井（1901－1995）が自宅を兼ねたアトリエを美術館として改装し、その敷地と所蔵作品を区に寄贈してできた美術館です。クヌギ、コナラ、ケヤキなどの樹木に囲まれたアトリエ館は武蔵野の面影を今に残すこじんまりとした建物であり、日本の風土と古民家をこよなく愛した向井の日常生活と制作への息づかいが感じられ、とても居心地の良い空間でした。

向井はその生涯をかけて失われゆく日本の民家と周囲の自然、そこに暮らす人々の生活を追いつけた画家であり、その作品には日本の原風景が息づいています。それはまた、戦後の高度成長の中で激変する日本の農村、ダムや高速道路の建設に伴う離村や廃村の様子などを、民家を通して記録することでもありました。“風土をそのまま造形化したような日本の民家”（向井）を観ていると、それは単なる郷愁や懐古ではなく、長い伝統によって受け継がれてきた奥深い重厚さと簡素さが、里山の自然と一体化したものであることがよくわかります。中村草田男の有名な句に例えれば、

古民家や 昭和は遠く なりにけり

といったところでしょうか。



「遅れる春の丘より」

2 新日本紀行

「昭和の古民家」といえば、私が小学生の頃に家族で観ていた NHK の番組「新日本紀行」が思い出されます。この番組は昭和 38 年から 57 年まで続いた長寿番組であり、当初は全国各地を訪ねて自然と風土、行事、風習などを紹介する番組でしたが、昭和 40 年代半ばからは地域に根ざして生きる人々の姿を描く「紀行ドキュメンタリー」のスタイルになりました（NHK アーカイブスより）。地方の美しい自然とは裏腹に高度経済成長に取り残されたような農村・漁村の高齢者たち、輝かしい発展の陰で急速に失われていく人々のつながりや故郷の自然など、経済優先の思想や自然破壊の社会に対する静かな文明批判のナレーションが、哀切を帯びたテーマ曲とともに今でも思い出されます。番組の冒頭に流れるテーマ曲は重厚なホルンの響きと拍子木の残響が何とも印象的であり、汽笛を鳴らし煙を吐きながら峻しい渓谷を走る SL の映像などと音楽が実によくマッチして、作曲家富田勲の才能が十分に感じられました。



「新日本紀行」

3 昭和の記憶

アトリエ館で意外だったのは、私のような中高年だけでなく 20～30 歳代の若者も多く来ていたことでした。古民家に限らず、昭和 30～50 年代の歌やファッション、文化などを懐かしむ若者が増えたのはいつ頃からなのでしょう。 「ALWAYS 三丁目の夕日」あたりから昭和レトロの懐古趣味が静かなブームになっているようですが、彼らが生まれる前の時代のことなので「懐かしい」というより「古くて新しい」という感覚なのでしょう。平成の若者である彼らにとってバブル時代のアイドルや昭和の歌謡曲などは、リアルタイムでなくてもどこかで見聞きしたような「不思議な懐かしさ」（既視感）を感じさせるようです。

考えてみれば、昭和 31 年生まれの私にとって親の世代（昭和ヒトケタ生まれ）は「戦争」という“暗くて重い時代”を生きてきた人たちであり、反対に 10 歳ほど上の人たち（団塊の世代）はまぶしくてうらやましい世代でした。彼らは「戦争を知らない子供たち」あるいは「怒れる若者たち」として常に時代や流行の先端を行く”フロントランナー”であり、自分たちは学生運動やアングラ文化の波が去ってから大人になった「遅れてきた青年」だったのです。いつの時代も若者は「遅れてきた世代」の「遅れてきた青年」であり、「古き良き時代」は常に美化される宿命なのでしょう。

戦争中の一時期、向井は陸軍報道班員として戦争画の制作に従事しました。終戦後はそれまでの経験や価値観が根底から否定され、「絵を描くことの精神的な支えまで無くなった」と後述しています。戦後から亡くなるまで、滅びゆく民家の藁ぶき屋根を求めて日本全国を旅した向井ですが、郷愁あふれる民家の姿を描き続けたその生涯は、心ならずも戦争に協力せざるを得なかった自分自身の心の傷をいやす「古民家巡礼の旅」だったのかもしれませんが。



「層雲」